

## キャリア発達における将来目標の役割： 生活満足度，学習動機づけ，向社会的行動との関連から<sup>1)</sup>

東京大学大学院教育学研究科 西村多久磨<sup>2)</sup>

高知工科大学共通教育教室 鈴木 高志・村上 達也

筑波大学大学院人間総合科学研究科 中山 伸一

筑波大学人間系 櫻井 茂男

The role of aspirations on career development: Relationships to life satisfaction, academic motivation, and prosocial behaviors

Takuma Nishimura (*Graduate School of Education, University of Tokyo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-0033, Japan*)

Takashi Suzuki and Tatsuya Murakami (*Department of Core Studies, Kochi University of Technology, Kami, Kochi 782-8502, Japan*)

Shin'ichi Nakayama (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Shigeo Sakurai (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The present study develops an Aspirations Index for Children based on self-determination theory and elucidates the role of aspirations. A total of 1,398 junior-high school students in the 7th to 9th grades participated in a questionnaire survey in Studies 1 and 2. The results of exploratory factor analysis reveal that the Aspirations Index consists of two aspirations: namely, intrinsic and extrinsic aspirations. As theoretically hypothesized, confirmatory factor analysis supports both seven sub-categories within the aspirations and a higher-order model. The results of correlation analysis indicate that, compared to extrinsic aspirations, intrinsic aspirations are positively correlated with life satisfaction, autonomous motivation for academic activities, and prosocial behaviors. In addition, we find that extrinsic aspirations are higher for boys than for girls. Finally, we discuss future directions and the benefits of using the Aspirations Index for Children for career education.

**Key words:** aspirations, career education, children, scale development, self-determination theory

### 問題と目的

我が国では、若者の雇用問題が深刻化している。例えば、平成24年度の労働力調査（総務省統計局、2012）によると、若年無業者は63万人で前年度から2万人の増加となった。また、中学校、高等学校、

1) We thank Dr. Tim Kasser (Knox College, USA) for helpful feedback for the Aspirations Index for Children.

2) 日本学術振興会特別研究員 (PD)

大学の卒業3年後の離職率も依然として高く、大きな社会問題として認識されている。さらに、萩原・櫻井(2008, 2009)は、現在の若者は「やりたいことを探し、自分らしい生き方を模索する」がゆえに、自分のキャリア選択に悩むことも多いことを指摘している。このような実態から、現在、一人ひとりの社会・職業的自立への支援を目的とするキャリア教育の重要性は日に日に高まっており、学校現場においても、小学生の段階からキャリア教育を充実させるという教育方針が打ち出されている(中央教育審議会, 2011)。

現代の若者が「自分らしい生き方」を追求し、悩みを経験しながらもキャリアを選択していくためには「勤労観」や「職業観」といった、若者が人生や職業に対して抱いている価値観が重要であると指摘されている。このような人生や職業に対して抱く価値観の指標として「将来目標 (aspirations or goals)」(Kasser & Ryan, 1993, 1996)が注目され、後述するように海外を中心に多くの検討がなされている。しかし、キャリア発達の見点にもとづくと、単に職業選択に直面する高校生や大学生といった学卒段階を対象とするのみならず、より初期の発達段階の将来目標に関する研究を行うことが必要である。特に、中学校は義務教育の最終段階として、多くの生徒が初めて進路選択に直面する時期にあたる。この点について、「中学校キャリア教育の手引き」(文部科学省, 2011)によれば、中学校は「現実的探索と暫定的選択の時期」とされる。すなわち、それまでの小学校段階での漠然と「将来のことを考える大切さ」や「憧れの職業をもつ」ことを目指したキャリア教育と異なり、中学校段階では「将来の夢や職業を思い描き、自分にふさわしい職業や仕事への関心・意欲を高める」といった、具体的な職業名を意識した目標が掲げられるようになるのである。この意味において中学校段階は、自己概念をキャリア的な文脈(職業名)へ翻訳する作業(Super, 1980; Super & Bachrach, 1957)の出発点に当たり、この段階での将来目標を検討する意義は大きいといえる。

しかしながら、これまで大学生や成人を対象とした研究は数多く報告されているものの、年齢の低い者を対象とした将来目標に関する研究は少ない。その原因は、そもそもそれらの対象に適した将来目標を測定する尺度が開発されていないことにあると考えられる。そこで、本研究では、子どもの将来目標の研究の先駆けとして、子どもを対象とした将来目標を測定する尺度を開発する。

将来目標を理論化した自己決定理論には、現在に

おいて六つのミニ理論が存在し、その内、将来目標は目標内容理論(goal contents theory)によって精緻化されている。この目標内容理論において、将来目標はアスピレーション(aspirations)やゴール(goals)などと呼ばれ、二つの目標群に大別される(Kasser & Ryan, 1993, 1996)。それらは、内発的将来目標(intrinsic aspirations, または intrinsic goals)と外発的将来目標(extrinsic aspirations, または extrinsic goals)である。このうち内発的将来目標とは、人間の本質的な心理的欲求と仮定される基本的心理欲求(有能感、自律性、関係性を求める欲求)を直接的に充足する人生の目標であり、自己成長(自己受容)、社会貢献、親密性の獲得、健康といった目標群より構成される。これに対して、外発的将来目標とは、主に報酬や社会的賞賛といった基本的な心理的欲求を間接的にしか充足しない人生の目標であり、金銭的成功、社会的名声の獲得、外見的魅力(イメージ)といった目標群より構成される。

これまでの一連の研究知見より、相対的に高い内発的将来目標を有することが、人生満足度等の精神的健康に正の影響を及ぼすことが様々な国のサンプルで明らかにされてきた(e.g., Kasser & Ryan, 1993, 1996; Kim, Kasser, & Lee, 2003; Nishimura & Suzuki, 2016; Ryan et al., 1999; Schmuck, Kasser, & Ryan, 2000)。これに対して、相対的に高い外発的将来目標が精神的健康に負の影響を及ぼすということは、不安やアルコール、タバコの過剰摂取、薬物乱用との関連などから支持されている(e.g., Duriez, Vansteenkiste, Soenens, & De Witte, 2007; Schmuck, et al., 2000; Vansteenkiste, Duriez, Simons, & Soenens, 2006; Williams, Cox, Hedberg, & Deci, 2000)。

本研究では目標内容理論にもとづき以下の二つの研究を行う。研究1では、中学生を対象に内発的将来目標と外発的将来目標の2因子から構成される尺度を作成する。また、それぞれの将来目標には下位尺度が想定されているため、これを確認的因子分析によって検証する。さらに、Ryan et al. (1999)が行ったように将来目標の性差についても検討する。そして、研究2では、将来目標と生活満足度、学習動機づけ、向社会的行動との関連を検討する。生活満足度については、この変数がsubjective well-beingを操作的に測定する指標であるため、自己決定理論においては代表的な従属変数の一つとして考えられてきた(Ryan & Deci, 2000)。内発的将来目標と正の相関関係が予想され、外発的将来目標よりもその関連は強いであろう。学習動機づけに関しては、そもそも学校における学習が将来を展望して行

われるため (Husman & Lens, 1999)、現在の学習動機づけは、将来目標のあり方から大きな影響を受けることが考えられる。この点を高校生において検討した鈴木・櫻井 (2011) によれば、学習時に内発的将来目標を意識することが、内発的動機づけや適応的な学習行動を促すことが報告されている。本研究でも内発的将来目標が、適応性が高いとされる自律的動機づけと正の関連を示すであろう。向社会的行動については、その定義内容から内発的将来目標との関連が予想される。向社会的行動は、他者の利益を意図した行動と定義される (村上・西村・櫻井, 2016)。こうした行動の背景要因の一つとして、内発的将来目標の一構成要素である社会貢献があると考えられる。したがって、内発的将来目標と向社会的行動との間には正の関連が予測される。将来目標は上述した通りキャリア発達と関係の深い変数であるといえるが、キャリア領域に特化した変数ではないこれらの変数に着目することによって、学校教育における将来目標の役割をより明確にすることができるであろう。

## 研究 1

### 方法

**調査協力者と調査時期** 2014年の7月に、関東圏の公立中学校3校の1年生から3年生719名 (男子365名、女子354名) を対象に質問紙調査が行われた。平均年齢は13.66 ( $SD=0.94$ ) 歳であった。対象者の内訳は、1年生は男子103名と女子112名、2年生は男子126名と女子118名、3年生は男子136名と女子124名であった。

**調査内容** 1) 将来目標: Kasser & Ryan (1993, 1996) の成人用の将来目標尺度の項目および目標内容理論の概念定義に従って、筆者らにより新たに36項目の原案が用意された。この36項目は成人版尺度の開発者である Kasser 氏によるエキスパートジャッジを受けた。これら36項目に対して、「以下には、将来に関する目標が並べられています。それぞれの目標を達成することはあなたにとってどのくらい重要ですか」という教示のもと、5件法 (1=まったく重要でない、2=少し重要だ、3=やや重要だ、4=けっこう重要だ、5=とても重要だ) による回答を求めた。

**手続きと倫理的配慮** 授業の前後等を利用し集団方式で実施された。筑波大学人間系研究倫理委員会の指針に従い、調査は学校の成績と一切関係がないこと、回答は強制ではないこと、個人のプライバシーは守られることをフェイスシートに明記した。

その上で、それらを口頭で調査協力者に伝え、同意する場合にのみ回答を行うように教示した。

**解析について** 平均値や標準偏差、信頼性係数、相関係数の算出は R 3.1.0 で行った。探索的因子分析および確認的因子分析は M-plus 7.11 で行った。また、M-plus 7.11 を用いた解析では完全情報最尤推定法による欠損値処理が行われた。

### 結果

**因子分析** 理論的背景を踏まえ、2因子解を想定した探索的因子分析を行った。負荷量の高さと項目内容のバラエティを重視し、各下位尺度4項目から構成されるよう項目数を精選した。Table 1 に示した通り、第一因子は、内発的将来目標に関する項目が高い因子負荷を示し、第二因子には、外発的将来目標に関する項目が高い因子負荷を示した。以上より、計28項目から構成される子ども用将来目標尺度が作成された。

次に、目標内容理論の想定に基づき、七つの下位カテゴリを想定し、確認的因子分析を行った。その結果、モデルの適合度は、 $\chi^2(329) = 1426.777$ ,  $p < .001$ , CFI = .906, TLI = .892, RMSEA = .068 (90%CI = [.065, .072]), SRMR = .056, であり十分な値が示された。さらに、内発的将来目標と外発的将来目標を二次因子、七つの下位カテゴリを一次因子とする高次因子分析を行った。内発的将来目標には、自己受容、親密性の獲得、社会貢献、身体的健康の四つの一次因子が、外発的将来目標には金銭的成功、外見的魅力、社会的名声の三つの一次因子が想定された。その結果、モデルの適合度は、 $\chi^2(342) = 1594.947$ ,  $p < .001$ , CFI = .892, TLI = .881, RMSEA = .071 (90%CI = [.068, .075]), SRMR = .069, であり、こちらのモデルでも十分な値が示された。なお Table 1 にて、短縮版の項目として使用が推奨されるものにアスタリスクをつけた。

**尺度の信頼性係数、平均値、標準偏差および相関係数** 各尺度の信頼性を確認するため、 $\omega$ 係数を算出した。 $\omega$ 係数は R 3.1.0 上で、psych パッケージの関数 omega() を用いた。Table 2 に示したとおり、各尺度において一定の内的一貫性が確認された。各尺度の平均値と標準偏差および尺度間の相関係数を Table 2 に示した。尺度得点には加算平均得点を用いている。内発的将来目標の得点が外発的将来目標のそれよりも相対的に高く、外発的将来目標の得点は三つの下位尺度とも理論的中央値に近い値となっている。また、理論から想定されるとおり、内発的将来目標と外発的将来目標の下位尺度間にはそれぞれ正の相関関係 (.49-.71) が確認され、その効果量は大きかった<sup>3)</sup>。一方で、他方の目標に対しては

Table 1  
子ども用将来目標尺度の因子分析の結果

項目	EFA		CFA
	F1	F2	7-factor
<b>内発的将来目標</b>			
<b>自己受容</b>			
* 将来, 自分自身の人生に責任をもてるようになること。	.73	-.11	.73
* 将来, 自分自身について多くのことを知り, 成長すること。	.69	-.02	.74
将来, 自分自身を知り, 受け入れること。	.64	.00	.69
将来, 自分の生き方や人生を自分なりに選ぶこと。	.57	-.02	.61
<b>親密性の獲得</b>			
* 将来, あなたのことを気にかけて, 支えてくれる人がいること。	.76	.01	.82
将来, 自分のことを気にかけてくれる人と, つながりを持つこと。	.76	.02	.82
* 将来, 頼りになる親友を持つこと。	.73	-.03	.75
将来, 人生をいっしょに楽しめる人がいること。	.61	.05	.67
<b>社会貢献</b>			
* 将来, 困っている人を助けること。	.68	-.04	.84
将来, ほかの人の生活を良くする手助けをすること。	.60	.02	.78
* 将来, 人の役に立ち, 世の中を良くすること。	.60	.04	.78
将来, より良い社会を, 実現するために働くこと。	.59	.09	.69
<b>身体的健康</b>			
* 将来, 自分が元気で, 暮らせること。	.75	-.05	.83
将来, あなたが元気いっぱいであること。	.73	.04	.82
* 将来, 体が健康であること。	.69	-.06	.78
将来, あまり病気になること。	.52	.06	.64
<b>外発的将来目標</b>			
<b>金銭的成功</b>			
* 将来, 高級なものをたくさん持つこと。	-.25	.85	.86
将来, ぜいたくなものをたくさん買うこと。	-.26	.80	.81
* 将来, お金がたくさんもらえる仕事に就くこと。	.04	.65	.64
将来, お金持ちになること。	-.02	.61	.62
<b>外見的魅力</b>			
将来, あなたの見た目が, 他人からすてきだと言われること。	-.02	.67	.82
* 将来, かっこよく (または, かわいく) なること。	.09	.66	.79
将来, いつまでも若く, みりよく的だと言われること。	.14	.67	.73
* 将来, 服装や髪型などの最新の流行についていくこと。	.21	.59	.71
<b>社会的名声</b>			
* 将来, たくさんの人から注目されるような人になること。	.14	.72	.84
将来, 有名になること。	.02	.76	.83
* 将来, えらくなり, 他人から認められること。	.10	.68	.72
将来, 社会的に地位の高い職業につくこと。	.06	.66	.70
	因子間相関 F1		.32

(注) \* のついた項目は, 短縮版の際に, その使用が推奨される項目である。

3) 本研究における相関係数の効果量の解釈については, Cohen (1992) を参照している。

正の相関関係 (.05-.36) が示されたものの、その効果量は相対的に小さく、大きくても中程度であった。

**将来目標の性差** 男女ごとに将来目標得点を算出し、*t*検定を行った。効果量はバイアスを補正したHedges'*g*を用いた。この値は、R 3.1.0上でcompute.esパッケージの関数tes()によって算出した。Table 3に示したように、男子の方が女子よりも外発的将来目標が高いことが明らかにされた ( $t=5.63, p<.001$ )。特に、男子の金銭的成功と社会的名声が女子より高いことが示された(順に、 $t=6.49, p<.001$ ;  $t=6.95, p<.001$ )。他の下位尺度に関して性差は確認されなかった。

### 考察

研究1の目的は、子どもの将来目標を測定する尺度を作成することであった。目標内容理論の想定通りに7因子から構成される尺度が作成され、高次因子モデルの適合度の値も良好であった。さらに各下位尺度において一定の信頼性係数が確認されたこと

から、研究1の目的は十分に達成されたと考えられる。

将来目標の性差については、金銭的成功と社会的名声といった、外発的将来目標に属する目標について性差が見られた。この結果は、小学生から高校生までを対象に、働く動機を調査した豊(2007)の結果と同様となった。これによれば、中学生と高校生ともに「経済・金銭上」や「社会的評価・地位・権威」といった働く動機は男子が有意に高かった。これは、保護者である成人男女が「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」(内閣府, 2012)という伝統的な性別役割観(固定的役割分担意識)を持っており(鈴木, 1997)、それが、子どもに継承されているものとも考えられる。また、内閣府(2014)による理想の結婚における家計分担を尋ねた調査では、20歳から40歳未満の成人男性の64.8%、同じく成人女性の68.4%が、夫(男性)が家計の担い手になることに肯定的な回答をしている。そして、結婚相手に求める条件についても、男性から女性に対し

Table 2  
将来目標の平均値、標準偏差、信頼性係数および尺度間の相関係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	$\omega$	a	b	c	d	e	f	g	h	i
a 内発的将来目標	4.36	0.62	.94		.32***	.87***	.87***	.82***	.81***	.13***	.36***	.35***
b 外発的将来目標	2.86	0.89	.94	.40***		.23***	.30***	.27***	.27***	.87***	.88***	.91***
c 自己受容	4.31	0.74	.82	.98***	.36***		.69***	.61***	.64***	.05	.27***	.29***
d 親密性の獲得	4.42	0.74	.88	.97***	.38***	.93***		.59***	.68***	.13***	.36***	.30***
e 社会貢献	4.09	0.83	.88	.83***	.34***	.79***	.77***		.49***	.08*	.30***	.33***
f 身体的健康	4.61	0.62	.89	.91***	.33***	.87***	.86***	.68***		.17***	.28***	.26***
g 金銭的成功	2.89	0.92	.91	.20***	.90***	.16***	.18***	.15***	.18***		.63***	.71***
h 外見の魅力	2.80	1.04	.87	.41***	.93***	.37***	.39***	.34***	.33***	.80***		.69***
i 社会的名声	2.90	1.03	.91	.39***	.99***	.36***	.37***	.34***	.32***	.87***	.89***	

注) 相関行列の上三角行列には観測変数、下三角行列には潜在変数によって算出された相関係数が記されている。

\*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.05$ .

Table 3  
将来目標の性差 (*t*検定の結果)

	男子 ( $n=365$ )		女子 ( $n=354$ )		<i>t</i> -test		Hedges' <i>g</i>	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>t</i>	<i>p</i>	<i>g</i>	95%CI
内発的将来目標	4.35	0.66	4.37	0.57	0.57	.571	0.04	[-0.10, 0.19]
外発的将来目標	3.04	0.88	2.68	0.85	5.63	<.001	0.42	[ 0.27, 0.57]
自己受容	4.29	0.79	4.34	0.68	0.77	.441	0.06	[-0.09, 0.20]
親密性の獲得	4.38	0.77	4.47	0.71	1.55	.121	0.12	[-0.03, 0.26]
社会貢献	4.11	0.84	4.06	0.81	0.79	.431	0.06	[-0.09, 0.21]
身体的健康	4.60	0.67	4.63	0.57	0.54	.591	0.04	[-0.11, 0.19]
金銭的成功	3.10	0.96	2.67	0.83	6.49	<.001	0.48	[ 0.34, 0.63]
外見の魅力	2.87	1.02	2.73	1.05	1.80	.073	0.13	[-0.01, 0.28]
社会的名声	3.15	1.03	2.63	0.96	6.95	<.001	0.52	[ 0.37, 0.67]

ては、「経済力があること (7.5%)」、「職種 (3.7%)」といった外発的将来目標に関連する条件を、わずかしか求めないのに比べて、女性から男性に対しては、より強く「経済力があること (52.5%)」や「職種 (16.7%)」を結婚相手に求める条件として挙げている。中学生でもすでに職業選択の意識に性差が現れているとされるが(豊, 2007; Gottfredson, 1996), 以上に示した伝統的性役割観や社会的風潮の影響もあり, 男子において金銭的成功や社会的名声といった外発的将来目標が重視されたのではないだろうか。いずれにしても, 以上の結果を踏まえ, 今後は性差を踏まえた検討を行う必要性が示唆されたといえる。

## 研究 2

### 方法

**調査協力者と調査時期** 2016年の7月に, 関東圏の公立中学校3校の1年生から3年生679名(男子332名, 女子347名)を対象に質問紙調査が行われた。平均年齢は13.25 ( $SD=1.00$ ) 歳であった。対象者の内訳は, 1年生は男子121名と女子119名, 2年生は男子97名と女子103名, 3年生は男子114名と女子125名であった。

**調査内容** 1) 将来目標: 研究1で作成した尺度である。最終的に選択された28項目に対して研究1と同様の5件法で回答を求めた。2) 生活満足度: 吉武(2010)がバックトランスレーションを経て作成した日本語版SLSS (Student's Life Satisfaction Scale; Huebner, 1991)を用いた。7項目に対して6件法で回答を求めた。3) 学習動機づけ: 西村・河村・櫻井(2011)が作成した尺度を用いた。自己決定理論(有機的統合理論)が想定している内的調整, 同一化的調整, 取り入れ的調整, 外的調整がそれぞれ5項目で測定される。さらに, この理論では内的調整と同一化的調整を自律的動機づけ, 外的調整と取り入れ的調整を統制的動機づけと扱うことがある(e.g., 西村・櫻井, 2013; Vansteenkiste, Sierens, Soenens, Luyckx, & Lens, 2009)。本研究では, 情報の煩雑さを回避するため自律的動機づけと統制的動機づけのパラダイムにもとづき検討を行うこととする。合計20項目に対して4件法で回答を求めた。4) 向社会的行動: 村上他(2016)が作成した対象別向社会的行動尺度を用いた。家族に対する向社会的行動, 見知らぬ人に対する向社会的行動, 友だちに対する向社会的行動がそれぞれ6項目で測定される。合計18項目に対して4件法で回答を求めた。

手続きと倫理的配慮 研究1と同様であった。

解析について 平均値や標準偏差, 信頼性係数, 相関係数, 偏相関係数の算出はR 3.1.0で行った。確認的因子分析はM-plus 7.11で行い, 欠損値は完全情報最尤推定法により処理された。

### 結果

**因子構造の再現性** 研究1で確認された因子構造が再現されるかどうかを確認するために, 確認的因子分析を行った。7下位カテゴリを想定したモデルの適合度は,  $\chi^2(329)=1307.283, p<.001, CFI=.909, TLI=.896, RMSEA=.066$  (90%CI=[.062, .070]), SRMR=.046, であり十分な値が得られた。さらに, 内発的将来目標と外発的将来目標を二次因子, 七つの下位カテゴリを一次因子とするモデルの適合度は,  $\chi^2(342)=1469.604, p<.001, CFI=.895, TLI=.884, RMSEA=.070$  (90%CI=[.066, .073]), SRMR=.063, であり, こちらも十分な値であった。各尺度平均値, 標準偏差および信頼性の指標である $\omega$ 係数をTable 4に示した。尺度得点には加算平均得点を用いている。

将来目標と生活満足度, 学習動機づけ, 向社会的行動との相関関係

次に, 将来目標と生活満足度, 学習動機づけ, 向社会的行動との関連を検討するために相関分析を行った。結果をTable 5に示した。その結果, 内発的将来目標は, 生活満足度や自律的学習動機づけおよび向社会的行動と正の相関関係を示し, その効果は中程度から大であった。また効果の大きさは中程度よりも小さかったが, 内発的将来目標と統制的学習動機づけとの間にも正の相関関係が示された。一方, 外発的将来目標については生活満足度と統制的学習動機づけと正の相関関係を示し, その効果は中程度であった。自律的学習動機づけと向社会的行動とも正の相関関係が示されているが, これらの効果

Table 4  
研究2で測定した尺度の平均値と  
標準偏差および信頼性係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	$\omega$
内発的将来目標	4.27	0.66	.94
外発的将来目標	2.51	0.90	.94
生活満足度	4.07	0.77	.86
自律的学習動機づけ	2.66	0.68	.93
統制的学習動機づけ	2.31	0.63	.88
向社会的行動	2.57	0.56	.89
家族(向社会的行動)	2.79	0.70	.85
見知らぬ人(向社会的行動)	1.92	0.71	.87
友だち(向社会的行動)	3.01	0.65	.81

は小さかった。

以上の相関関係について、内発的将来目標と外発的将来目標とに差がみられているかどうかを確認するため、相関係数の差の検定 (Meng, Rosenthal, & Rubin, 1992) を行った。その結果、内発的将来目標の方が外発的将来目標よりも相関関係の大きかったものは生活満足度 ( $z=2.15, p=.032$ )、自律的学習動機づけ ( $z=6.96, p<.001$ )、向社会的行動 (全体) ( $z=6.15, p<.001$ )、家族に対する向社会的行動 ( $z=4.92, p<.001$ )、見知らぬ人に対する向社会的行動 ( $z=3.58, p<.001$ )、友だちに対する向社会的行動 ( $z=6.44, p<.001$ ) であった。一方、統制的な学習動機づけについては、外発的将来目標の方が内発的将来目標よりも相関係数の値が大きかった ( $z=3.47, p<.001$ )。なお、Table 5 には参考資料として、性別と一方の将来目標を統制した偏相関係数も示してある。

### 考察

研究2では、まず研究1で作成された子ども用将来目標尺度の因子構造の再現性を確認した。そして、将来目標と生活満足度、学習動機づけ、向社会的行動との関連を検討した。その結果、理論的に予想された通り、内発的将来目標は、これらと正の相関係数が確認され、さらにその相関係数の効果は外発的将来目標の同様の相関係数の効果よりも大きいことが示された。

生活満足度との関連については、予想通り内発的将来目標と正の相関関係がみられたものの、外発的将来目標とも正の相関関係が示された。この結果だけに着目すれば、子どもの場合は、外発的将来目標は心理的適応を阻害する要因であるとは強く主張することはできないようである。また、自律的な学習動機づけや向社会的行動との関連においても正の相関関係があるとはいえないものの、負の相関関係を示したわけでもなかった。しかしながら、内発的将来目標が外発的将来目標よりも精神的健康と強い正の相関関係を示したことは、目標内容理論と整合す

る結果であるといえる。Ryan et al. (1999) に示されているように、目標内容理論が重視するのは、内発的将来目標と外発的将来目標のバランスであることをふまえると、子どもに対しても、内発的将来目標の獲得を重視することが教育的にはより重要であるといえよう。

### まとめ

キャリア発達とは「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」である (中央教育審議会答申, 2011)。この定義に示されている「各個人の自分らしい生き方の実現」を支援するためには、まず、人は自分の人生に対してどのような価値観を重視しているかという点を理解する必要がある。本研究は、これまで測定することができなかった子どもを対象とした将来目標尺度を作成することによって、キャリア教育の展開に対して一定の貢献がなされたものと考えられる。特に、内発的将来目標はその定義の内容からも、我が国のキャリア教育においてより重要視されている目標といえる。そして、その内発的将来目標を重視することは、生活満足度、自律的学習動機づけ、向社会的行動などと関連することが示された。すなわち、将来目標はキャリア領域に留まらず、学校教育において期待されるポジティブな変数をも促進する役割を有することが示されたのである。今後は、縦断調査を用いた予測研究や進路選択などのキャリア変数、客観指標などとの関連研究などを実施し、子どもの将来目標に関する研究知見を蓄積していく予定である。さらには、本研究では学校教育において期待されるポジティブな変数と関連がみられたが、そのメカニズムを明らかにすることも重要な課題である。

Table 5  
将来目標の平均値、標準偏差、信頼性係数および尺度間の相関係数

	生活満足度	学習動機づけ		向社会的行動			
		自律的	統制的	全体	家族	見知らぬ人	友だち
内発的将来目標	.43*** (.37)	.47*** (.46)	.23*** (.13)	.41*** (.40)	.29*** (.28)	.25*** (.25)	.48*** (.47)
外発的将来目標	.33*** (.24)	.13*** (-.01)	.40*** (.37)	.10*** (-.01)	.03 (-.05)	.06 (-.02)	.17*** (.06)

注) ( ) 内の値は性別と一方の将来目標を統制変数として用いた偏相関係数である。

\*\*\*  $p<.001$ .

## 引用文献

- 中央教育審議会答申 (2011). 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申) [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm) (2016年5月1日)
- Cohen, J. (1992). A power primer. *Psychological Bulletin*, *112*, 155-159.
- Duriez, B., Vansteenkiste, M., Soenens, B., & De Witte, H. (2007). The social costs of extrinsic relative to intrinsic goal pursuits: Their relation with social dominance and racial and ethnic prejudice. *Journal of Personality*, *75*, 757-782.
- Gottfredson, L., S. (1996). Gottfredson's theory of circumscription and compromise. In D. Brown, L. Brooks, & Associates (Eds.), *Career Choice and Development* (pp.179-232). San Francisco, CA: Jossey-Bass Publishers.
- Grouzet, M. E., Kasser, T., Ahuvia, A., Fernandez-Doles, J. M., Kim, Y. Lau, S. Ryan, R.M., Saunders, S., Schmuck, P., & Sheldon, K. M. (2005). The structure of goal contents across 15 cultures. *Journal of Personality and Social Psychology*, *89*, 800-816.
- 萩原俊彦・櫻井茂男 (2008). “やりたいこと探し”の動機における自己決定性の検討——進路不決断に及ぼす影響の観点から—— 教育心理学研究, *56*, 1-13.
- 萩原俊彦・櫻井茂男 (2009). 「やりたいこと探し」の動機とキャリア選択における意思決定の困難さとの関連 筑波大学心理学研究, *38*, 79-87.
- Huebner, E. S. (1991). Initial development of the student's life satisfaction scale. *School Psychology International*, *12*, 231-240.
- Husman, J. & Lens, W. (1999). The Role of the future in student motivation. *Educational Psychologist*, *34*, 113-125.
- Kasser, T., & Ryan, M. R. (1993). A dark side of the American dream: Correlates of financial success as a central life aspiration. *Journal of Personality and Social Psychology*, *65*, 410-422.
- Kasser, T., & Ryan, M. R. (1996). Further examining the American dream: Differential correlates of intrinsic and extrinsic goals. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *22*, 80-87.
- Kim, Y., Kasser, T., & Lee, H. (2003). Self-concept, aspirations, and well-being in South Korea and the United States. *Journal of Social Psychology*, *143*, 277-290.
- Meng, X. L., Rosenthal, R., & Rubin, D. B. (1992). Comparing correlated correlation coefficients. *Psychological Bulletin*, *111*, 172-175.
- 文部科学省 (2011). 中学校キャリア教育の手引き 教育出版
- 村上達也・西村多久磨・櫻井茂男 (2016). 家族、友達、見知らぬ人に対する向社会的行動——対象別向社会的行動尺度の作成—— 教育心理学研究, *64*, 156-169.
- 内閣府 (2012). 男女共同参画社会に関する世論調査 [http://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2012/201303/201303\\_05.html](http://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2012/201303/201303_05.html) (2016年7月19日)
- 内閣府 (2014). 平成26年度「結婚・家族形成に関する意識調査」報告書 <http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/h26/zentai-pdf/> (2016年7月19日)
- 西村多久磨・河村茂雄・櫻井茂男 (2011). 自律的な学習動機づけとメタ認知の方略が学業成績を予測するプロセス——内発的な学習動機づけは学業成績を予測することができるのか?—— 教育心理学研究, *59*, 77-87.
- 西村多久磨・櫻井茂男 (2013). 小中学生における学習動機づけの構造的変化 心理学研究, *83*, 546-555.
- Nishimura, T., & Suzuki, T. (2016). Aspirations and life satisfaction in Japan: The big five personality makes clear. *Personality and Individual Differences*, *97*, 300-305.
- Ryan M. R., Chirkov, V. I., Little, T. D., Sheldon, K. M., Timoshina, E., & Deci, E. L. (1999). The American dream in Russia: Extrinsic aspirations and well-being in two cultures. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *25*, 1509-1524.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, *55*, 68-78.
- Schmuck, P., Kasser, T., & Ryan, R. M. (2000). Intrinsic and extrinsic goals: Their structure and relationship to well-being in German and U.S. college students. *Social Indicators Research*, *50*, 225-241.
- 総務省統計局 (2012). 労働力調査 <http://www.stat.go.jp/data/roudou/report/2012/> (2016年5月1日)
- Super, D. E. (1980). A life-span, life-space approach to career development. *Journal of Vocational Behavior*, *16*, 282-298.

- Super, D. E., & Bachrach, P. B. (1957). *Scientific career and vocational development theory*. New York: Bureau of Publications, Teachers College, Columbia University.
- 鈴木高志・櫻井茂男 (2011). 内発的および外発的な利用価値が学習動機づけに与える影響の検討 教育心理学研究, 59, 51-63.
- 鈴木淳子 (1997). 性役割——比較文化の視点から—— 垣内出版株式会社
- 豊 浩子 (2007). 親とのコミュニケーションがキャリア発達に与える影響 国立教育政策研究所 (編) キャリア教育への招待 (pp.73-93) 東洋館出版社
- Vansteenkiste, M., Duriez, B., Simons, J., & Soenens, B. (2006). Materialistic values and well-being among business students: Further evidence for their detrimental effect. *Journal of Applied Social Psychology, 36*, 2892-2908.
- Vansteenkiste, M., Sierens, E., Soenens, B., Luyckx, K., & Lens, W. (2009). Motivational profiles from a self-determination perspective: The quality of motivation matters. *Journal of Educational Psychology, 101*, 671-688.
- Williams, G. C., Cox, E. M., Hedberg, V., & Deci, E. L. (2000). Extrinsic life goals and health risk behaviors in adolescents. *Journal of Applied Social Psychology, 30*, 1756-1771.
- 吉武尚美 (2010). 中学生の生活満足度に関連するポジティブ・イベント——イベントの項目収集と相互影響関係の検討—— 教育心理学研究, 58, 140-150.

(受稿9月30日：受理10月26日)